第２回　埼玉輸血フォーラム「安全で適正な輸血のために」

開会あいさつ

埼玉県合同輸血療法委員会　代表世話人　　前田　平生

皆さん、こんにちは。高いところから失礼いたします。埼玉県の合同輸血療法委員会の代表世話人として、一言ごあいさつ申し上げます。今日は週末で、しかも寒い中、かくも大勢というほどではないんですけれども、お集まりいただきまして、ありがとうございます。

今日は世話人会の皆さん、それから、実は昨年、この輸血フォーラムの会場をいろいろと探したのですが、なかなか公設のところが取れませんでした。そこで、さいたま赤十字病院さんにお願いしましたところ、快く、しかも無料で会場をお貸しくださいまして、厚くお礼を申し上げます。

この会は一応、第２回の埼玉輸血フォーラムと称して、主催は合同輸血療法委員会ということでございます。昨年度、発足いたしまして、その目的としては、埼玉県の輸血療法を安全で適正なものに推進していくということです。その趣旨で、今日のフォーラムを開催させていただきました。

まず、その安全ということの中には、少なくともＡＢＯの異型輸血は、絶対やってはいけないということで、輸血の副作用の中でも、これだけはしないような仕組みを、取りあえずつくらないといけない。

それで、昨年度も診療所を含めまして、いろいろな検査体制、そのようなことについてのアンケート調査をしましたけれども、必ずしも、その検査体制が十分ではないということが分かっておりましたので、今年度は、輸血業務検討小委員会を県の合同輸血療法委員会の下につくっていただきまして、アンケートを実施して、そこから安全に輸血をやっていくためにはどうするかということを、今日ご報告していただけると思います。

それからもう１点の、適正使用なんですけども、適正使用に関しましては、もう皆さんはご存じだと思いますけど、国の方から、特に凍結血漿、アルブミンの使用節減ということが、輸血管理料というようなものを導入しまして、その適正化を図っているわけですけれども、現実にはやはり診療科別、あるいは疾患別と言いますか、そういう部分における凍結血漿なり、アルブミンの使用ということに関しては、必ずしも十分に検討が行われていないということがあります。

そこで今回は、特に凍結血漿をどうしても使わなくてはいけない産科、あるいは心臓血管外科というところでの使用実態というものを、まず報告をしていただきまして、その中で、どういう製剤を、どのように使っていけばいいかということを議論をしていただきたいと思っております。

それと、今年になりまして、ちょっと私も衝撃的だったのですが、うすうすは分かっていたのですが、今年の『朝日新聞』に出たわけですが、10 年後、15 年後ぐらいには、100 万人ぐらいの血液が不足するのではないかというような予測があります。これに対して、確かにいまのところはぎりぎり 100％供給で進んでいるんですけども、ただ、将来的には需要が供給を確実に上回る

だろうと。

ですから、それに対して、献血を当然ながら推進していこうとは思っているのですが、ほかの方法ですね、例えば自己血輸血ということも、やはり推進をしていく必要があるのだろうと思っています。

もう一方では、いわゆる使用を、今回は血液使用に関しては、赤血球なんですけれども、これ自体もやはり適正に使用するということも考えなければいけない。その中で、特に大量出血、それから大量輸血という状況においては、これは普段の輸血とは桁違いに、やはり量を使うわけです。これは赤血球のみならず凍結血漿もかなり大量に使います。ですから、この辺に対しても、何か方策を立てないと、適正化というのもなかなか難しいのではないかと思っております。

これに関しては、特別講演として、愛知県血液センターの高松先生に、これまでの実績と言いますか、今後の血液製剤供給に関しても、何か提案とか、提言というものをいただければと思っております。

いろいろと安全から、適正から、血液不足まで、少々テーマが大きすぎるかとは思うんですけれども、やはり県全体でやるとなると、そのぐらいの視野で検討しますので、皆さんの忌憚のない意見をいただきまして、合同輸血療法委員会を有効に活用していただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。